

# 韓国人日本語学習者における日本語のアクセントの 弁別能力について

—無意味語を用いた調査から—

## A Study of Japanese Accent Discrimination Ability in Korean Japanese Learner

— An Investigation Using Nonsense Words —

李 京姫

Kyoung Hee Lee

### 1. はじめに

韓国語（特にソウル方言）にはアクセントがないと言われているが、韓国語母語話者でさえ普段は認識していない「句アクセント」<sup>1)</sup>の規則がある<sup>2)</sup>。このように韓国語（本研究では韓国語というのはソウル方言を指すものとする）にアクセントがないと誤認されているのは、韓国語は日本語のようにアクセントに弁別機能を持たないためであると考えられる。

また、このようなアクセント機能の違いにより、韓国人日本語学習者は日本語のアクセントの産出の際に誤用を起こしやすいことが予測され、実際に母語干渉による誤用の存在が先行研究で指摘されている。例えば、ある特定の音が語頭に来る際、日本語にないアクセントのパターンを用いる傾向にあるという報告がある<sup>3)</sup>。このように、韓国人日本語学習者には日本語のアクセントの産出の際に一定の母語干渉が見られるようである。このことから、本研究では日本語のアクセントの弁別面においても母語干渉が見られるのではないかと予測を立てた。

本研究は、この予測に基づき、初級の韓国人日本語学習者を対象として日本語のアクセントの弁別能力を調査し、アクセントの弁別について母語干渉の視点から考察したものである。その際には無意味語を用いたアクセントの

弁別テストを実施し、その結果を日本語母語話者に実施した同様のテストの結果と比較し、韓国人日本語学習者の日本語のアクセントの弁別能力について考察を加えた。

## 2. 本研究におけるアクセント型の表記

一般的に、アクセント型はアクセント核があるかないかによって大きく2つに分けられる。すなわち、アクセント核がある起伏式およびアクセント核がない平板式である。さらに、起伏式は語頭にアクセントの核がある頭高型、語末にアクセントの核がある尾高型、そして、語頭と語末以外にアクセントの核がある中高型に区別される。そのうち平板型および尾高型は後に助詞が付かないと区別できないため、助詞を付けて2つのアクセント型を区別する必要がある。

そこで、本研究では助詞を付け、語末からアクセント核を数えることで、アクセント型を以下のように提示する。

まず、アクセントの核がない型（いわゆる平板型）を0型、語頭にアクセントの核がある型（いわゆる頭高型）を1型とする。語頭以外にアクセントの核があるものは、アクセント核の位置を語末から数え、語末にアクセントの核がある型（いわゆる尾高型）を-1型とする。いわゆる中高型は、語末から2拍目にアクセントの核があるものを-2型、語末から3拍目にアクセントの核があるものを-3型、語末から4拍目にアクセントの核があるものを-4型とする。

## 3. 先行研究

### 3.1 韓国人日本語学習者の日本語のアクセントの習得に関する先行研究

#### 3.1.1 アクセントの弁別能力に関する先行研究

韓国人日本語学習者におけるアクセントの弁別能力に関しては、「東京語アクセントの聞き取りテスト」<sup>4)</sup>を分析した横断研究および縦断研究が報告されている。

まず、李・鮎澤・金（1997）は韓国の3方言地域の大学生の韓国人日本語学習者に対して実施した「東京語アクセント聞き取りテスト」を分析している。その結果、方言差が日本語学習者の東京語アクセント聞き取りに影響を与えていることが示されている。また、拍数が増えるにつれて正答率が下がるという結果も示された。さらに、各地域とも学年別では成績にほとんど差がないこと、特にソウルの学習者は平板型（本研究では0型に当たる）・尾高型（同-1型に相当）の成績が最もよく、頭高型（本研究では1型に当たる）アクセントの聞き取りがもっとも苦手であることが指摘されている。

李・鮎澤・西沼（1997）はソウル出身の1、2、3学年の大学生日本語学習者108名を対象とした「東京語アクセントの聞き取りテスト」の結果を分析した。その結果、テスト1の正答率が最も高く、拍数別の平均正答率は3拍が63%、4拍が49%、5拍が41%で、拍数が増えるにつれ、正答率が下がっている。そして、学年別の正答率は1、2年生では差がなく、3年生が若干高く、アクセントの弁別能力に個人差が大きいことが指摘された。

縦断研究には李・西沼・三枝（1997）がある。「東京語アクセントの聞き取りテスト」を用い、ソウル出身の日本語専攻の大学1、2、3学年の54名を対象として、2回のテストも行い、その伸びを観察した。

その結果、テストの得点には伸びが見られた。また、拍数が増えるにつれて正答率が低くなっているが、正答率の伸びを見ると、拍数が増えるにしたがってよくなっている。

アクセント型ごとに1年間の変化を見ると、伸びが一番大きいのは5拍語の0型（本研究では0型または-1型に相当）、次に大きいのは4、5拍語の1型（同1型に相当）で、変動が見られないのは4拍語の2、3型（同各々-3型、-2型に相当）、0型（同-1型に相当）および5拍語の3型（同-3型に相当）であった。また、テスト3においては、4拍語の1型（同1型に相当）は伸びが見られたが、それ以外のところは若干の伸びかほぼ同じであった。さらに、4拍語の3型（同-2型に相当）と、5拍語の3型（同-3型に相当）では減少が報告されている。

この李・西沼・三枝（1997）の結果から、アクセント型によって学習の成

果に違いがあることがわかる。また、この研究では、習得度には個人差が大きいことが指摘されている。

このように先行研究では、方言差が日本語学習者の東京語アクセント聞き取りテストの結果に影響を与えていること、ソウルの日本語学習者においては個人差が大きいことなどが指摘されている。一方、学年別では成績にほとんど差がないことから、日本語の学習歴はアクセントの弁別能力に影響を与えていないことが示唆されているが、アクセント型によっては日本語学習を通じて弁別能力に伸びが見られるようである。

しかし、先行研究では調査の際、平板型と尾高型の区別がなされていない。平板型と尾高型は後ろに助詞が付かないと区別できないが、実際の日本語発話では名詞のみで用いられることは少なく、助詞を付いて用いるのが普通である。このため、平板型と尾高型を区別して調査する必要があると考えられる。

### 3.1.2 産出能力に関する先行研究

韓国人日本語学習者のアクセントについて、福岡（2006）は、語頭に無声破裂音が来ると母語干渉によって「HL」型に、拍数が多くなると頭高型にして産出する傾向があるとしている。一方、語頭が有声破裂音の場合は「LH」型になり、拍数が多くなると中高型にしやすい傾向があるとしている。

高橋（2007）は、韓国人ソウル方言者57名が生成する音の高さと語頭の音環境の相関を調査した。方法は調査協力者に32語の日本語の無意味語を読み上げてもらうもので、調査語はすべて4拍語であった。その結果、母音・鼻子音で始まる場合、「LHLL」のパターンが多く見られたが、無声破裂音・無声摩擦音で始まる場合、「HHLL」のパターンになることが多いということ明らかにした。

この2つの研究から、韓国人日本語学習者が日本語発話を行う際には語頭の音環境がピッチパターンに影響しやすいことが分かる。アクセントの産出には母語干渉が見られるということである。このことから、本研究では、産

出面に限らず弁別面においても母語干渉が見られる可能性があるという仮説を立てて、弁別の実態を調査した。

## 4. 調査の概要

### 4.1 調査の目的

本調査の目的は、韓国人日本語学習者に日本語のアクセントの弁別面において母語干渉が見られるかどうかを調べることである。上述のように韓国語は日本語のようなアクセントの弁別機能を持たないことから、韓国人日本語学習者が日本語のアクセントを弁別することは困難であろうと考えられる。すなわち、弁別機能を持たない韓国語の母語干渉が日本語のアクセント弁別の際に表れると予測できる。この予測を検証したい。

一方、先行研究で報告されているように、韓国語は音環境によりアクセント型が決まるという韓国語のルールに基づき、アクセントの産出の際には母語干渉が見られるようである。しかし、本研究では、語頭の無声破裂音、無声摩擦音からの影響を除外するため、語頭子音を鼻音に限定した無意味語を用意した。

### 4.2 調査の内容

無意味語の弁別テストは「ここに、○○があります (います)」または「○ ○とよみます」という文全体を2回ずつ聞かせ、「○○が (と)」に当たる部分のアクセント型を解答させる形をとった。-1型と0型を区別するため、問題文、回答欄とも助詞を付けたものにした。所要時間は約10分である。

調査で使用した語は38語、「ま」を拍数分用いて作った無意味語である。表1に示したように、各アクセント型、拍数毎に、異なる助詞を付けた2個を設けた。

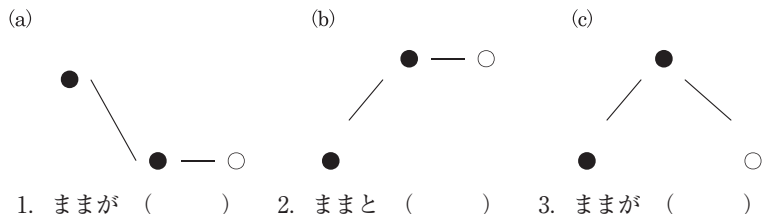
1型の2拍語から5拍語、0型の1拍語から5拍語、-1型の1拍語から5拍語、-2型の3拍語から4拍語、-3型の4拍語と5拍語、-4型の5拍語の19グループ、38語である。

表1 調査語の構成

アクセント型 \ 拍数	1拍語	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
1型	/	2	2	2	2
0型	2	2	2	2	2
-1型	2	2	2	2	2
-2型	/	2	2	/	/
-3型	/	/	/	2	2
-4型	/	/	/	/	2

弁別テストの解答用紙は、以下の例のように無意味語には黒い丸を、助詞には白い丸を用いた。1拍語の場合は2選択肢から、2拍語は3選択肢、3拍語は4選択肢、4拍語と5拍語は5選択肢から一つを選ぶ形式である。

回答用紙例) 【2拍無意味語】



4.3 調査の実施

調査協力者は初級の韓国人日本語学習者(以下、KSとする)26名で、日本語母語話者(以下、JSとする)は33名である。KSは韓国の大学で日本語を専攻している1年生で、男性6名、女性20名、全員ソウル方言話者である。JSは、日本語専攻の大学3年生、男性11名、女性22名である。

KSの調査は2007年6月に、JSの調査は2008年7月に行った。

## 5. 弁別テスト結果と考察

### 5.1 総合結果

KS の弁別テストの平均正答率は59.9%、JS の平均正答率は71.5%である。 $t$  検定の結果からは、両グループの平均評価点においては有意差が認められた ( $t(57)=2.16, p<.05$ )。

この結果から、KS の日本語のアクセント弁別能力はJS には及ばないこと、正答率が約60%という低さから KS にとってやはり日本語のアクセントの習得は難しいものだと言えることが確認された。アクセントによる意味の弁別機能を持たない韓国語の母語干渉の可能性が指摘できる。しかし、KS と JS のアクセントの弁別能力は同等でないことが確認されたとはいえ、JS の正答率も高くないことから JS にとっても無意味語のアクセントの弁別は困難であると言えるだろう。

以下では、アクセント型別に調査結果を分析し、さらに KS における誤答の分析を通じて母語干渉の可能性を考察する。

### 5.2 アクセント型別の正答率

まず、各テストのアクセント型別の正答率を見る。KS と JS のアクセント型別の正答率を図1に示した。

KS のテストでは、1型が72.2%、0型が76.2%、-1型が65.8%、-2型が37.5%、-3型が28.8%、-4型が3.8%の正答率であった。0型正答率が最も高く、1型が次に続く。そして、-4型が最も低いことから、KS にとって0型が最も習得しやすいアクセント型であり、-4型が特に習得しにくいアクセント型であることが窺える。ここから、KS は、アクセント核の有無は弁別できるが、アクセント核の位置は容易に弁別できないと考えられる。

一方、JS の正答率は、1型が75.4%、0型が83.3%、-1型が77.8%、-2型が53.8%、-3型が53.0%、-4型が39.4%であった。

JS においても、0型が83.3%と正答率が最も高く、-4型が39.4%と最も低かった。このことから、JS にとっても、0型が最も弁別しやすいアクセント

型であり、中高型の中でも -4型が特に弁別しにくいアクセント型であることが窺える。

このように、弁別テストの結果、KS においても JS においても、アクセント型別の正答率は0型が一番高く、-4型が一番低いという同じ傾向が得られた。そして、中高型に分類される -2型、-3型、-4型は両者で正答率が低い。KS にとっても JS にとっても中高型のアクセント型についてはアクセント核がどこにあるのかを弁別するのが難しいものだと考えられる。

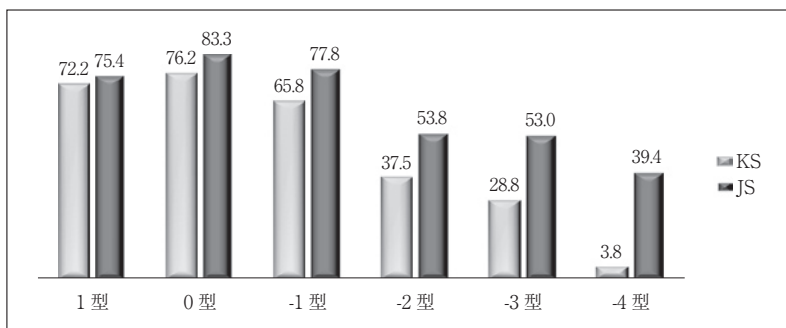


図1 弁別テストのアクセント型別の正答率

### 5.3 拍数別の正答率

KS および JS における無味語テストの拍数別の結果について述べたい。

まず、KS における拍数別の正答率は、1拍語から5拍語がそれぞれ84.6%、76.9%、60.1%、50.0%、49.6%である。1拍語が最も正答率が高く、5拍語が最も正答率が低いという結果が得られた。つまり、拍数が増えるにつれ正答率が下がるという点では先行研究と同様の結果が出た。

一方、JS における拍数別の正答率は、1拍語から5拍語がそれぞれ92.4%、84.3%、97.0%、60.6%、65.5%である。JS では、3拍語が最も正答率が高く、5拍語が最も正答率が低いという結果が得られた。つまり、拍数が増えるにつれ正答率が下がるという韓国人学習者についての先行研究と異なる結果が得られた。



このことから、先行研究（李・西沼・三枝1997：341）の予測は、選択肢が増えることにより誤答も増えるという今回の調査協力者であるJSについては立証できないことが分かった。他言語母語話者にはこの予測が当てはまるかどうかは今後の調査が必要である。

KSとJSの拍数別の正答率をそれぞれ比較すると、1拍語では7.8ポイントの差が、2拍語では7.4ポイントの差が、3拍語では36.9ポイントの差が、4拍語では10.6ポイントの差が、5拍語では15.9ポイントの差がそれぞれ見られた。この中でも、JSの正答率が最も高かった3拍語における差と、KSの正答率が最も低かった5拍語における差が大きい。

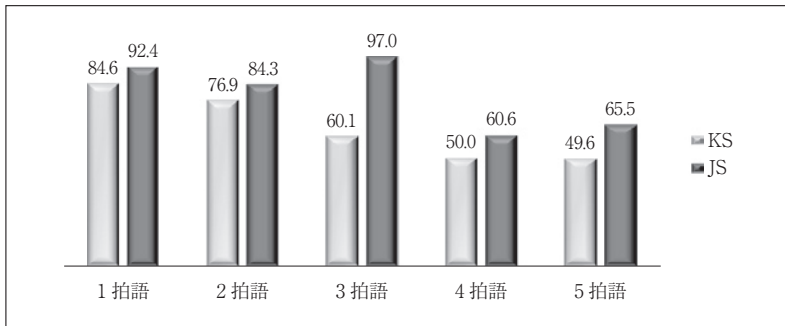


図2 弁別テストの拍数別結果

#### 5.4 誤答分析

5.2で述べたようにKSにおいてもJSにおいても-2型、-3型、-4型が比較的正答率が低いという結果が出た。この原因を探るため、-2型、-3型、-4型の問題に対する回答を分析し、その分布を表2から4にまとめた。

まず、-2型に対する解答分布を見てみる。KSの場合、3拍語において、正答率は50.0%であり、誤答の中では-1型とした答えが最も多く21.2%であった。また、4拍語においても、-1型と誤って回答したものが40.4%と最も多く、正答(28.8%)を大きく上回っている。KSは-2型を-1型と聞き取る傾向にあることが分かる。例えば、「オフ'ロ<sup>5)</sup>(お風呂)」という語を「オフロ」と聞き

間違えるおそれ考えられる。

JS の場合、-2型3拍語において、正答率は59.1%であり、誤答の中では-1型とした答えが最も多く24.2%であった。また、4拍語においても、正答率は48.5%であり、-1型と誤って回答したものが34.8%と最も多かった。このことから、JS も -2型を -1型と聞き取っていることが分かった。

このように、KS においても JS においても -2型を -1型と聞き取っているという同様の結果が得られた。

表2 -2型に対する回答分布（太字が正答、単位：%）

アクセント型		拍数						全体
		1型	0型	-1型	-2型	-3型	無回答	
3拍語	KS	11.5	17.3	21.2	<b>50.0</b>		0	100
	JS	7.6	7.6	24.2	<b>59.1</b>		1.5	100
4拍語	KS	3.8	11.5	40.4	<b>28.8</b>	15.4	0	100
	JS	0.0	7.6	34.8	<b>48.5</b>	9.1	0	100

次に、-3型に対する回答分布を見てみる。KS の場合、4拍語において、正答率は21.2%であり、誤答の中では-1型とした答えが最も多く40.4%で、正答を上回っている。また、5拍語においても、正答率は36.7%であり、誤答の中では-1型と答えが最も多く32.7%であった。KS は -3型を -1型と聞き取る傾向にあることが分かる。

JS の場合、-3型4拍語において、正答率は40.9%であり、誤答の中でも -1型と回答したものが最も多く25.8%であった。5拍語において、正答率は65.2%であり、誤答の中でも -1型とした答えが最も多く18.2%であった。このことから、JS も -3型を -1型と聞き取っていることが分かった。

このように、KS においても JS においても -3型を -1型と認識しがちであるという同様の結果が得られた。

表3 -3型に対する回答分布 (太字が正答、単位:%)

拍数 \ アクセント型		アクセント型							無解答	全体
		1型	0型	-1型	-2型	<b>-3型</b>	-4型			
4拍語	KS	5.8	13.5	40.4	19.2	<b>21.2</b>	/	0	100	
	JS	9.1	13.6	25.8	10.6	<b>40.9</b>	/	0	100	
5拍語	KS	0.0	17.3	32.7	/	<b>36.7</b>	15.4	0	100	
	JS	4.5	9.1	18.2	/	<b>65.2</b>	3.0	0	100	

次に、-4型に対する回答分布を見てみる。KSの場合、5拍語において、-1型と誤って回答したものが38.5%と最も多く、正答(3.3%)を大きく上回っている。KSは-4型を-1型と聞き取る傾向にあることが分かる。

JSの場合、5拍語において、正答は39.4%であり、誤答の中でも-1型とした答えが最も多く24.2%であった。このことからJSも-4型を-1型と聞き取っていることが分かった。

このように、KSにおいてもJSにおいても-4型を-1型と聞き取っているという同様の結果が得られた。

表4 -4型に対する解答分布 (太字が正答、単位:%)

拍数 \ アクセント型		アクセント型							無解答	全体
		1型	0型	-1型	-2型	-3型	<b>-4型</b>			
5拍語	KS	7.7	15.4	38.5	/	34.6	<b>3.8</b>	0	100	
	JS	3.0	15.2	24.2	/	18.2	<b>39.4</b>	0	100	

5-2で、KSにおいてもJSにおいても-2型、-3型および-4型の正答率が比較的低い結果となったことを述べた。さらに上の分析で、KSにおいてもJSにおいても-2型、-3型および-4型を-1型と誤って回答するという同じ傾向が明らかになった。このことから、-2型、-3型および-4型の弁別が難しいのはアクセントが意味の弁別機能を持たない韓国語の母語干渉のためではないと考えられる。

また、1型と0型の正答率が比較的高いということから、KSはアクセント

核の有無は識別できると言える。一方で、-1型、-2型、-3型および-4型の正答率が比較的低いのは、KSがアクセント核の位置を識別するのが難しいためであると考察できる。

今回の調査結果に示されたように、KSにとって弁別が特に難しい-2型、-3型、-4型の弁別は、JSにとっても難しいものである。しかし、アクセントの規則（日本語の特殊拍はアクセント核を持たないことなど）を知ることにより、KSでも正答率を高くしてJSの弁別能力に近づくことは不可能ではないと予測される。アクセントの教育が必要であると言えるだろう。

## 6. まとめ

本研究では、日本語のアクセントの弁別面において、韓国語の母語干渉が見られるかどうかを測定するため、無意味語を用い、アクセントの弁別テストを実施した。さらに、JSにもKSと同様のテストを実施し、その結果をKSと比較した。その結果、KSの日本語のアクセントの実態について、以下のことが明らかになった。

まず、弁別テストの正答率の $t$ 検定の結果からKSとJSのアクセントの弁別能力には有意差が見られた。KSにとってやはり日本語のアクセントの弁別は難しいことだと言える。特に-2型、-3型および-4型においては有意差が認められたため、いわゆる中高型においてKSの日本語アクセントの弁別能力はJSより劣っていることが明らかになった。

次に、アクセント型別の正答率は0型が最も高く、-4型が最も低いという結果となった。これはJSと同じ傾向である。そして、比較的正答率が低かった-2型、-3型および-4型の回答分布を分析した結果でも、-1型と回答するJSと同じ傾向が見られた。

しかし、拍数別に分析した結果、拍数が増えるにつれ正答率が下がるという点では先行研究と同様の結果が得られた。これは3拍語が一番正答率が高く、5拍語が一番正答率が低いJSの結果とは異なるものである。

以上のことから韓国人学習者は日本語母語話者より日本語アクセントの弁

別能力が低く、拍数が増えるにつれ、弁別の難しさが高まることが明らかになった。また、日本語母語話者と同様に、アクセント核の有無ではなく、アクセントの核の位置を判別するのが困難であることが分かった。しかし、アクセントのルールを学ぶことにより韓国人学習者でも正答率を高くすることができると予測される。アクセントの教育が必要であると言えるだろう。

## 注

- 1) 韓国語のソウル方言における句アクセントというのは、日本語のアクセントとは異なり、文節単位で存在している音の配置関係を示す。
- 2) チョン (2002) (『韓国語の抑揚の基本教育方案』) p.227
- 3) 高橋 (2007)、福岡 (2006)
- 4) 「東京語アクセントの聞き取りテスト」の概要について、李・鮎澤・西沼 (1997: 88) は以下のように述べている。この「聞き取りテスト」は3つの種類があり、それぞれのテストには3、4、5拍語のアクセント型の異なる語句24項目が含まれる。テストの形式はテスト1は、語やフレーズが単独で提示され、テスト2では、<a>「それは、……です。」、<b>「じゃー、それが、……？」の「…… (?)」の部分の切り出した語やフレーズが提示され、テスト3では、「わたしは、……と言った」という文全体が2回提示され、そのうち、「……」の部分の語やフレーズのピッチの下がり目について回答する形式である。アクセント型については、アクセント核が1拍目にある (1型) とき、1型とし、2拍目、3拍目、4拍目にあるとき、それぞれ2型、3型、4型とした。また、0型は0型および-1型を含む。
- 5) 「'」はアクセント核を表す。

## 参考文献

- (1) 李明姫・鮎澤孝子・金世連 (1997) 「韓国語母語話者「東京語アクセント聞き取りテストの結果—ソウル、釜山、光州方言話者の場合—」『21世紀の日本語音声教育に向けて』新プロ「日本語」研究班3「音声言語の音韻特徴に関する実験的研究」平成8年度研究成果報告書、23-30
- (2) 李明姫・鮎澤孝子・西沼行博 (1997) 「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本学報』第38輯、87-98
- (3) 李明姫・西沼行博・三枝優子 (1997) 「日本語学習者の東京語アクセントの聞き取り能

- 力の変化—ソウル地方の場合—」『釜山女子大学校論文集』第44輯、339-350
- (4) 高橋宜子 (2007) 「韓国人日本語学習者の無意味語のアクセント」『日本語教育方法研究会誌』 vol.14 No.1、64-65
- (5) チョン・ミヨンスク (2002) 「韓国語の抑揚の基本教育方案」『韓国語教育』13-1、国際韓国語教育学会、225-241 [原文韓国語、標題・著者名など筆者訳: 정명숙 (2002) 「한국어 억양의 기본교육방안」『한국어교육』13-1、국제한국어교육225-241]
- (6) 福岡昌子 (2006) 「韓国人日本語学習者の語頭破裂音を含む語のアクセントパターンについて」『第20回日本音声学会全国大会予稿集』111-116